

優秀賞論文要旨

母性保護論争における山川菊栄

大 嶋 美 里

母性保護論争とは、1918年から1919年にかけて与謝野晶子・平塚らいてう・山田わか・山川菊栄により『婦人公論』や『太陽』誌上で行われた論争である。四者は各々異なった思想的背景をもとに、女性の職業と母性保護の問題について論じた。

この論争の発端は、与謝野の小文「女子の徹底した独立」であった。国に対し「依頼主義」である限り女性が経済的独立を果たすことは不可能だとして、与謝野は母性保護を受けることに反対した。これに対し平塚は「母性保護の主張は依頼主義か」の中で、女性は母となることで社会的・国家的存在となるため、国から経済的補助を受けることは当然だと反論した。また、山田も「母性保護問題—与謝野氏と平塚氏の所論に就て」において同じく国に母性保護を求める立場をとり、家事と育児こそが女性の天職であるとした。

そして同じ頃、山川は「母性保護と経済的独立—与謝野・平塚二氏の論争」の中でこの論争における与謝野と平塚の主張を整理・分析し、理論的裏付けを与えた。彼女は女性の経済的独立と母性保護の必要性をどちらも一部認めた上で、労働問題の根本的原因である資本主義社会の変革について論じ、同時に家事と育児の社会化についても述べた。

この母性保護論争に関する先行研究では、与謝野や平塚の主張が批評されていることが多い。柴田博美は山川に焦点を当て彼女の思想を述べているが、これは生い立ちを踏まえたものであり、評論などについては取り上げていない。

そこで本論では、山川の自叙伝『おんな二代の記』と、彼女が論争前後に執筆した女性の労働問題に関する評論から、山川が論争の中でこのような主張を行うに至った思想的背景を総合的に再検討した。

特に今回取り上げた四つの評論からは、山川がこの論争前後に女性の労働問題について、一貫して抱いていた考えが見られた。それは良妻賢母主義に対する批判と、家事と育児を社会化することの必要性である。良妻賢母主義は山田が主張したように家庭を中心とするものであり、結婚や出産、育児をする女性は、夫や子どものため家庭を守る良き妻や母になることが求められる。しかしそれでは、山川が重視するような個人としての可能性が失われ、自らが持っている他の能力を発揮する機会が得られなくなってしまう。

そこで、家庭と外での職務を両立・共存させるために山川が主張したのが、家事と育児の社会化であった。当時の日本ではなされていなかった家事と育児の社会化を行い、女性を少しでも家庭から解放することを彼女は考えたのである。このことについて論争当時はまだ深く主張されていなかったものの、その後彼女が必要性を唱えた背景にはやはり自らの出産と育児の経験があり、それによって以前より実感を持った主張を行ったのではないかと考えられる。また別の背景としては、その後山川が社会主義国家や欧米諸国における充実した福祉環境について興味を持ったことが挙げられる。外国の政策や事例を知り学んでいったことが、日本の家事と育児の社会化に関する具体的な考えを彼女の中で育てていったのではないだろうか。

山川はこの論争後も、日本における社会問題をあらゆる角度から見つめていくことになる。1937年には「消費統制と婦人」の中で、戦時中に食糧難に悩まされる女性について触れている。また、1967年には「現代の家庭と老人問題」において、日本の高齢化社会についていち早く言及しており、国際比較のデータを用いてイギリスの老人ホームの事例など外国における福祉政策の紹介も行っている。さらに、亡くなる2年前の1978年には「母性偏重は古い」の中で北欧の福祉政策を紹介しており、家庭や仕事に性別は関係なく男女どちらにも

義務や権利は同じように与えられていると述べた。

このように山川は常に時代と状況に寄り添った形で、女性の労働問題を始めとするあらゆる社会問題に触れてきた。彼女が長年かけて構築していった考え方は今後の社会問題について模索する上でも、少なからず解決の糸口となり得るのではないだろうか。